

竹久夢二の生涯における人形製作活動の位置づけ

王文萱（京都大学）

竹久夢二（1884－1934）は「夢二式」と呼ばれる大正浪漫を代表する画家で、絵画では挿絵や日本画、洋画、グラフィックデザインなど、文学では詩歌や童謡、童話など、多様な分野に及んで創作している。昭和時代に入ると、夢二は人形製作に執心し、昭和五年（1930）に、「どんたく社」という人形製作グループが結成した。また、同年の二月に、銀座の資生堂で、「雛によする展覧会」という人形展覧会を開催した。「雛によする展覧会」は当時、高い評価を受け、大成功を収め、人形作品もすべて売りつくした。

夢二とどんたく社同人との人形が現代の創作人形に大きな影響を与えたことは、確実である。田中圭子の「日本における球体関節人形の系譜」（『社会科学』2008）によると、人形が芸術作品として認識されるようになったのは昭和に入ってからのものであり、昭和初期における夢二の人形製作は、工芸とは異なる展開をしていく創作人形の萌芽であったと述べている。では、もともと挿絵やグラフィックデザインで人気を博した夢二は、どうしてこの時点で人形製作に執心したか。

美術史家・評論家の森口多里は、夢二が人形製作によって自分の創作に新境地を開くと述べている。森口の論述によると、夢二が自分の創造した新しいタイプの適用と、その新しい打開とを、森口の知っている限りでは、少なくとも三度計画したという。ただし、これだけの説明によって夢二の人形製作への執心を解釈するのは足りないと考えられる。また、尾崎左永子は『竹久夢二抄』（1983.03.28、平凡社）で「しょせん、それも『男の遊び』のひとつに過ぎなかったのかもしれない」と、夢二の人形製作を論じたが、夢二の人形製作活動は、それほど簡単なことではないと考えられる。

本発表では、まず夢二の「人形」への執着に着目する。「雛によする展覧会」の案内状に、「幾年かの間に心構えが変わってきて（略）雛から人形へ、人造人間へ。遂にまた人形の欲するある生きものへ」と書いたように、「人形」を作る欲は、前から夢二の心の中に潜んでいたと窺われる。そして、夢二が「雛によする展覧会」に着手する前の人形製作活動や、「雛によする展覧会」当時、夢二自身と周りの動きから、夢二がどうしてその時点で、人形という手段を選び展覧会を開いたか、を論じる。最後は、夢二が人形製作という手段を通して、自分の創作にどのような新境地を開いたか、を論じる。以上の論述によると、人形製作活動というのは、夢二の生涯においてどのような位置づけとなっているか、をはっきりさせることができると考えられる。